

あぢさゐりは水色月はほそき鎌

藤田湘子

紫陽花で思い浮かぶのは、江戸時代に長崎の出島に來日したドイツ人医師フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト。彼が愛した遊女、楠本瀧の呼称「お瀧たきさん」をとつて、アジサイの新種名として「Hydrangea otaksa」ヒデランゲア オタクサと命名したとも言われている。

湘子の詠んだ「水色のあぢさゐり」は、西洋で品種改良された手毬咲きのそれではなく、もつと質素な日本原産の額アジサイのような気がする。

昭和五十八年六月十四日の月齢は、三日月。一日十句の開始からはや四月よ。この頃が一番苦しかったそうだが、馬酔木調の清澄で穏やかな叙景句。私なら、前日作の「冷奴一夜泊まりの父あはれ」を推奨しておきたい。

1983年 (S58.06.14作) 第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩